

激動の幕末・明治維新史料

第19回 講義 版籍奉還と廃藩置県（原田先生）

1班 広報担当 2022年12月6日

本日は本年最後の授業でした。配布資料は「版籍奉還と廃藩置県」。武力(戊辰戦争)で幕府を支持する勢力を潰した新政府が、戦費と近代化で膨大な借金を抱えながら、新しい国作りを模索する様子について解説していただきました。

(1)中央集権化された新しい国家の枠組み

*新政府をどうつくるか

昨日まで、中下級武士であったものが、公家や大名を押さえて実権をにぎるためには、天皇を活用するしか方法は無かった。慶応4年、「五か条の御誓文」を天皇が天神地祇に誓約することで、「広く会議を起し万機公論に決すべし」との方針を公家・大名・旗本に認めさせた。これが具体的に実現するのは、明治23年の帝国議会であった。新政府では、課題として「万国対峙」「人民安堵」の2つを掲げ、これらの実現に向けて、以下の「版籍奉還」「廃藩置県」を行った。

*「版籍奉還」

徳川時代には全国各地は「藩」によって支配される地方分権の状態であり、明治維新後も「藩」が税を取り立てている状態であった。天皇を中心とした国家体制を整えようと中央集権化を狙う明治政府にとって幕藩体制は邪魔な存在であった。そこで明治2年、薩長土肥の4藩が中心となり、土地(版)と人民(籍)を朝廷に返還することを上表し実現させた。

*「廃藩置県」

版籍奉還によって形式的な中央集権体制は整ったが、まだ藩同士の対立や新政府に対する反抗的な風潮が現れていた。明治4年、西郷隆盛、木戸孝允らは、明治政府として廃藩置県を命じた。藩は県となり全国で3府302県となり、各県には県令が派遣された。こうして全国の県・府は新政府の直接統治下に入った。廃藩置県は強行されたが、反抗するものが出る時は、薩長土の軍事力を集めて設置した「御親兵」によって抑え込むことにした。

(2)新しい国家を海外の知恵を借りながら急速に形成

*貿易の推進 兵庫、新潟の開港 大坂、東京の開市 居留地の準備

*インフラの整備 蒸気船の就航(大阪神戸間、東京大阪高知間) 電信、郵便、鉄道

*通貨制度の改革 (新貨条例により、両から円へ)、鎮台の設置(東京、大阪、熊本、仙台)

*学制、地租改正

(3)原田先生からのこぼれ話

*「廃藩置県」があまりにスムーズに行われたので、海外からは驚きの目で見られた。

*日本は欧米を「中央集権国家」と考えていたが、実際には完全な中央集権では無かった。

*大阪と東京を結ぶ鉄道は、海岸沿いでは戦時に船で攻撃されやすいため、中山道で計画されたが、トンネル工事や急こう配のため、実現できず、現在の東海道上で開発された。